母がソープに
堕ちてました。
～何も知らない爆乳母は、熟れた身体で息子に奉仕する～

すぅぅ……、はぁぁぁぁ

真夏の陽射しが鋭角に差し込む電車内。
流れる景色に向かって、俺はひとり大きく息を吐いた。
車窓が曇り、景色に霞がかかる。

母さん…俺の顔、忘れてやしないだろうな…

何度も深呼吸したが、やはり不安は拭えない。
高校生になった俺を見て、母が自分の息子だと認識できなかったとしたら……そんな嫌な予感がどうしても頭を過ってしまう。

十年…だもんな…

十年――そう、十年だ。

俺は今日、十年ぶりに母に会う…。

プロローグ

俺の名前は高橋弘弥。十七歳。地方在住の、ごく普通の高校生。
今日はずっと音信不通だった母と再会するため、普段来ることのない隣町へと足を運んでいた。

シルバークイン…ねぇ

興信所で貰ったメモを見ながら、誰に話すでもなく呟く。メモには現在の母の職場であり、今回の待ち合わせ場所でもある「シルバークイン」なるお店の情報が簡単に記されていた。

いかにも『夜のお店』って感じの名前だよな…

恐らくは場末のスナックか何かだと思うが、正直よく分からない。母の捜索を依頼した探偵曰く、「行けば分かる」らしい。

にしても職場で待ち合わせなんて…母さんそんなに忙しいのか…？

胸の奥にわずかな引っかかりを感じつつも、俺は逸る気持ちを両脚に乗せて進んだ。

繁華街の外れにある雑居ビル三階。
メモに記されていたその場所に、シルバークインは確かに店を構えていた。すでに開店中らしく、店内には明かりが灯っている。中の店員がチラチラとこちらを伺っているが、俺は店の前に立ち尽くしたまま、一歩も動けずにいた。

ソープランド…
SILVER QUEEN…

安っぽい看板に書かれた文字を読み上げる。どうやらシルバークインはスナックじゃなかったらしい…。

ソープランド……ソープって、ソープだよな…

高校生にもなれば、それがどういう店かは分かる。
その店で行われている行為も…、経験こそないが理解はしていた。

母さんの職場がソープ…
母さんがソープ嬢…？
いやでも…ソープで待ち合わせなんて絶対おかしい……絶対に変だ

さすがに何かの間違いではないかと、疑ってしまうが…。

……中で確認するしかないか…

俺は地面に張り付いた靴底をひっぺ返し、シルバークインへと足を踏み入れた。入って右手のカウンターには受付の男性がいて、俺の姿を認めると小さくお辞儀をした。

し…七時に待ち合わせしてた高橋なんですが…

興信所の探偵から伝え聞いていた文言を、そのまま受付の男性に伝える。

待ち合わせ…ですか？

……はい…

そうだ…まだ清掃員とか…事務員なんて可能性も…

あ、あぁ…はい お待ちしておりました高橋様 ご指名ありの四十分コースですね ——こちらの部屋へどうぞ

ご指名あり… 四十分コース…

カウンターから出て案内してくれる男性。小さな部屋に俺を通すと、料金はすでに支払済みだと言って去っていった。

……

ハァ…

……駄目だコレ…

待ち合わせでも何でもないわコレェ…

ドアが閉まると同時に俺はがっくりと首を垂れた。今の店員の言葉によって、わずかな可能性は完全に失われてしまった。

指名って…母さんの事か…

ソープで働いてるんだ…母さん…

消え入りそうな声で、半ば諦め気味に呟く。考えたくもない事実だが、そうとしか考えられなかった。

クッソ！

何が「母親に会いたければここへ行け」…だ！

子供だと思って馬鹿にしやがって…！

依頼した探偵の、メモを渡す時の下卑た笑みが頭に浮かぶ。段取りを全て興信所に任せていた俺にも、責任があると言えばあるのだが…。

……

母さん…俺がここに来るって知らないよな……絶対……

不安が一つ増えてしまう。しかしこの場で踵を返すという選択肢は、今の俺には全くなかった。

母に会いたいという気持ちは、この程度では揺るがない。

どんな仕事をしてても、母さんは母さんだった。

そうだ…とにかくこれで母さんと会える

…やっと……会えるんだ…

俺は気持ちを切り替える為、胸板に掌を乗せて深く息を吸った。

ゆっくりと目を閉じ、ソファーに沈めた身体を丸くする…。

あれは――まだランドセルの重さにも慣れていなかった頃。
酒乱の気があった父に、母はいつも殴り倒されていた。
俺を抱えて、声もなく泣く母。
そんな母を守れなかった、悔恨の想い…。
母が失踪してから、ずっと思い出さないようにしていた。
嫌な思い出。
思い出したくもない過去。
弱く幼い俺は、そんな記憶を封印していた。
母に会いたいという思いも、丸ごと心の奥に閉じ込めていた。
あれから…十年…。

――コンコン。

は――はい！

静寂を破るノックの音に、俺はハッとして目を開けた。
ほとんど反射的に返事をし、丸めていた背筋を伸ばす。

失礼します

ドアの向こう側から聞こえてくる、品のある女性の声。
聞き覚えのあるその声に、俺は思わずソファから跳び
上がった。

お待たせ致しました
お客様

本日はご利用いただき、
誠にありがとうございます

あ……
ご指名に与りました
亜耶です
父が他界し…、かつての思いが甦り…。

俺は今、再び母の前にいる――。

第一章　　再会

っ……!!
母さんだ。本当に母さんだ。名前が違うけど……、なんかスゴい恰好してるけど…、間違いない。あの頃のまんまだ!
あ……、あぁ……!
十年越しの…万感の思いが、言葉にならない声となって溢れだす。
俺は目の前の母に抱きつきたい衝動を必死に抑え、自分を諌めるように姿勢を正した。
あ…あの…、あのっ…!
落ち着け。落ち着いて、息を整えて……ずっと心に閉まっておいた、あの言葉を今――。

か、…母さ――

……しかし……。

……

どうされました
お客様？

……

えっ……？

ん……？
何度も言葉を詰まらせる俺を、首をかしげながら見つめる母さん。
眉一つ動かさず、涙を浮かべる事もない。
その瞳には、何の感情も宿っていない。
……あぁ
なんてこった……。
こんな事って…。

母さん…忘れてる

俺の顔……俺の声……

それは想定していた事態だったとは言え、想定を大きく超えて俺の精神を揺さぶった。

う…かっ……

俺はもう一度呼びかけようと試みる。しかし上手く声が出ない。…ついでに言うなら、息もできない。

っ…あ…

歪む視界。地面が遠のくような錯覚と共に、足元が…揺らぐ……！

あっ…！お客様!?

刹那、狭い室内に驚声が響く。
俺は体勢を崩して後ろに倒れそうになるが、その寸前
…っ！……えっ？
ソファーに触れるよりはやく、全身が温かな
ものに包まれて止まった。

大丈夫ですか!?

見上げると、俺を抱きながら心配そうに見つめる母さん
の顔があった。昔と同じ…いや、昔よりずっと綺麗な顔。
そして俺の胸板には……。

……

……う……うわぁ……

ぷにゅ

押し当てられた女性の象徴。
巨大な水風船のような感触が、薄い布地の向こう側から伝わってくる。俺は自分の顔が紅潮していくのを、この時はっきりと自覚した。

ご……ごめん……、なさい

……んふふ
大丈夫よ…
怖がらないで…？
母さん……
なだめるような声が耳先を撫でる。
俺の身体を締め付けていた見えない鎖が、ゆっくりと
解けていく……。

……立てる？

はい…

俺は茫然とした頭のまま母さんに手を取る。

二人で立ち上がると、両手を強く握って見つめ合った。

それじゃあ、行きましょうか

はい…

今度は片方の手だけを絡ませて、俺は母さんと共に
奥の部屋へと向かう。
さっきまでの絶望感は、どこかに消えてしまって
いた。

もしかして……こういうお店に来るの、初めて…？
え、えぇ…まぁ…
個室へ入ると、そこはベッドルームとバスルームが合わさったような、妙竹林な部屋になっていた。
そっか……じゃあ女性とエッチな事するのも…？
はい…それも、まだ…
他愛もない雑談をする俺達だったが…、
ちょっ！わわっ！

突然、母さんが扇情的なドレスの帯布を解き始める。
目の前にいるのが実の息子とはつゆ知らず、早速サービスを開始しようとする。

四十分だと、実はあんまり時間がないの

急かすようで悪いんだけど…あなたも脱いで…？

いや！ま、待ってください…！俺…！

急すぎる展開に、俺は慌てて背を向けた。

ヤ、ヤバい…！ウダウダしてる場合じゃなかった！

さっさと言わないと…！

母の美貌に中てられ、惚けてしまった脳みそを俺は頭を振って強引に醒ます。

こんな会話をしに来たんじゃないだろ…！

母子として会わなきゃ意味がないだろっ！

母さんが気付いていないのなら、俺から打ち明けるしかない。

俺が弘弥だと……、あなたの息子だと。

そうだ…そこから始めるんだ

母さんに全て打ち明けて、再会を喜び合って…！

どうしたの…？

まだ、緊張してる…？

後ろから声。俯いたまま押し黙る俺を、心配する声。

よし…！

そんな母の声に決意が固まる。俺は本来の目的を果たすため、大きく息を吸って振り返った。

あっ…あの、俺――…

お……!?

お…おわぁ――!!

その瞬間、目の前の光景に、出かかった言葉が消えてしまう。

本来の目的も、頭から吹き飛ぶ。

っっ…!!

はっ、裸…!全裸!!

それは高校生の息子がいるとはとても思えない、見事な裸体だった。はち切れんばかりの乳房とくびれた腰、そしてそこからまた大きく膨らみを描くヒップ。慎ましく生える陰毛だけが、まるで少女のようで…。

……っんく…

今度は唾をのむ。

母のヌードに、圧倒される――。

マ…マズい…
これはマズい…！

なんつーか一人の人間として、
これはとてもマズい!!

不確かだった感情が、徐々に確固たるものへと変わっていく。
あり得ないと思っていた欲望が、俺の心を支配していく。
どうしよう…
まさかこんな事が…
俺、母さんに…
……実の母親に……。
…欲情してる……

んふふ
また真っ赤になっちゃったね…
――一方。
彫像のように固まってしまった俺とは対照的に、母さんは余裕の表情で肩を揺らした。
それにあっちの方も…
こんなおばさんの裸でも、反応してくれるのね…❤
そしてひとり何かを呟くと、すたすたと近づいてくる。
へ…
っ…えっ!?

こんな状態じゃ脱ぎ辛いでしょ…？
私が手伝ってあげるね…❤
母さんはそう言って俺の前に跪くと、
シャツのボタンに手をかけた。
何が出るかな♪
歌いながら服を脱がせ始める。
いや、ちょっ！
待って待って！
～♪
ゴソ
ゴソ
慌てふためく俺には目もくれず、母さんの手は止まらない。
流れるようにシャツを脱がせ、次いでズボンのトップボタンを外し……。
よい…しょっと！

掛け声と共に、最後に残ったパンツを……。

あ……

あっ!!

俺を覆っていた布がすべて取り払われる。

そしてその時になって、俺はようやく自身の体の変化に気が付いた。

まぁ凄い❤❤

うわぁ❤

ばばん

勃起。エレクション。男性特有の生理現象。

天を衝く努張が、母の眼前にて元気に反り返る…。

ひゃ…ひゃあぁ――!!

俺は股間を手で押さえながら、内股のまま入ってきたドアの前まで高速で後退った。
恥ずかしい…顔から火が出そうなくらい恥ずかしい!!

そういう反応をされるとなんだか新鮮でいいわね

クスクスと笑う母さん。

仕事柄、男の股間など見慣れているのだろうが、その反応は少しショックだった。

隠す必要なんてないわ

びっくりするくらい立派だった……ホントよ……

頬に手を当て、今度は熱っぽく笑う。
母の面影は薄れ、俺の見たことのない、女の相貌に変わっていた…。

母さん…
なんて顔してるんだ…

不思議ね…

あなたを見てると、
なぜだか胸の奥が苦しくなる…

言いながら、母さんは巨大な双丘を揺らして再び俺との距離を詰めてくる。
俺はいっそこの場から逃げようとドアノブを握るが、自分も全裸なのに気付いて開けられなかった。

ちょっ…

あ、…あのっ…

あ…う……

ドアと母さんに挟まれ、身動きが取れなくなった俺の頬に温かな手が置かれる。

大丈夫よ…何も怖くないわ…

……っ

絶対…気持イイから

ぴと…

私が天国に連れていってあげるから……ね？

んっ…❤
……!?
そして何の前置きもなく…口づけ。
んちゅ…んっ…❤
ん…
ちゅ♡
んっ!っ!?
ちゅ…むちゅ…
んっちゅ…❤
母さんの艶やかな唇が俺の唇を覆う。
俺は数秒の間、自分が何をされたのか分からなかった。

キ、キス…!?
俺…母さんとキスを…!?
自慢じゃないが、彼女いない歴＝年齢の俺である。
初キスが母親という、かなりアレな状況に最初は困惑するが…、
んちゅ♡
ちゅむ…ちゅる❤
んっ…ちゅ…❤
ちゅ…
ちゅ♡
んちゅ…んっ！
ちゅむ♡
な…何この感触…
なに、この――!?
んっっ！
割とすぐにどうでもよくなる。

その感触、その柔らかさ。
初めて味わうキスの衝撃は、それ以外の情報を根絶やしにした。

ちゅ…んんっ！

ん…♡

舌……出して…

んん…

ちゅる♡

っんん…ちゅ…❤

っ……はいっ…！

ちゅっ…

ちゅる…ちゅ…❤

んちゅ♡

…あ…頭がっ…
脳がとろける……！

誇張でもなんでもなく、本当に頭の奥がチョコレートみたいに
溶けていくような……そんな感覚だった。

んふっ…んちゅ…
ちゅむ…❤
っんっ…、んちゅ
あぁぁ…コレ…駄目だ…
母さん……
強張っていた全身の筋肉が急速に弛緩していく。
理性が薄れ、ふわふわと、幸せな浮遊感が俺を包み込む。
ちゅ…ちゅむ…❤
ん…♡
ちゅ…♡
母さんの舌…
…俺の……中に…
ちゅぷ…んっ…ちゅ…
ちゅる……
……ちゅ……
んちゅ…♡

しかし、幸せはいつも長く続かない。
母さんの唇が緩やかに圧を失い、俺から離れていく。

あ……

……もしかして……
キスも初めてだった…？

はぁ♡

はい……

唾液に濡れる母さんの唇を、
ぼんやりと眺めながら頷く。

そっか……ファーストキス
奪っちゃったね

ゴメンね

いえ…そんな…
スゴく、よかったです
……えへへ…

妙に恥かしくて照れてしまう。
口元が上がるのを抑えられない。

笑うと八重歯が見えるんだ…
おちんちんはこんなに
怒ってるのに
んふふ……かわいいね❤
っ……
そうだ…
そろそろこっちの方も…
可愛がってあげないとね❤

そう言って母さんが再び俺の前に跪く。
猛る逸物を、ゼロ距離で見つめられる。
な…なにをっ…
びくっ
びくんっ
いいから…
じっとしてて…

んっ…ちゅ…❤
っ…!!
ふぁあ!?
れろ…
ぶるっ
突然の愛撫。鬼頭に甘い痺れが駆け抜ける。
俺は反射的に腰を引こうとするが、後ろにドアがあって無理だった。
駄目よ…んちゅ❤
動かないで…ちゅぶ…
れろっ…❤んっ…ちゅう❤

や…やめっ…！
洗ってないから…！
き、汚いです…!!
んちゅ、汚くなんてないわ
むしろ美味しい…んっ❤
汚れなど歯牙にも掛けない様子で、
母さんは蒸れた肉棒に舌を這わす。
っあぁ！
亜耶さんっ…駄目…！
レロ
レロ
ちゅ
んちゅ
んちゅ…んっ…❤
こっちのキスも
イイでしょ❤ちゅ…❤
でも……
本当に気持ちイイのは
ここからよ❤❤
…ん…あむっ…❤
んっ…んぢゅっ❤❤
ぐぐ…
あっっ!!

一旦舌を引いた直後。
大きく開かれた母さんの口の中へ、俺の逸物が
じゅるりと呑み込まれてしまう。
あ…亜耶さんっ…！
なっ……うっくぅ!!
じゅるぅ❤おちんちん
ビクビクして…かわいい❤
んっ…それにしても
んちゅ…！
ぢゅむむぅ❤
んぢゅるっ…
これだけ大きいと
しゃぶり甲斐があるわね…
んっ…❤ぢゅぶっ❤❤
ぢゅ
むぢゅ
びくっ
頭を前後に動かしながら、いやらしい水音を立てて
母さんはペニスをしゃぶる。
初めて味わうフェラチオ。
口の中では、信じられない速さで舌が蠢いていた。

あひぃ！んぁ！んあぁあ…!!
やめっ…まっ…！

それは……これまでの人生で味わったことのない、
凄まじい快感だった。
強すぎる刺激に、苦痛だと錯覚してしまう程の…。

んっ…その喘ぎ声も
とってもかわいい…ちゅ❤
もっと激しくしたく
なっちゃう…❤❤

ジュルル
ジュッ
ジュッ

んちゅ…
ちゅぶぶっ❤

んでゅるぅ❤❤

っは！あぁ！
い…いやだ！
待って…!!

タイム！
タイムっ!!

鬼頭全体を母さんの灼けた舌が縦横無尽に這いずりまわる。
軽くパニックに陥る俺。
爪を突き立てたドアの木目から、ガリガリと摩擦音が鳴った。

ちゅぶっ…ちゅむっ！
敏感なのね…❤
安心して…すぐによくなるわ
…んっ…❤ちゅぶぶ…❤
や、やめてこんなのっ
こんな事…!!くぅう!!
母さんやめてくれ！
母子で…こんな事…！
眼下で繰り広げられる実母の下劣な
行為に、俺は消えかけていた理性を
慌てて叩き起こす。
んっ太いっ❤
顎が外れそうっ
ぢゅ…ちゅる❤
じゅるぅるぅ❤
つくぅ！ぅぅ！あぁ!!
い、いやだ！離してっ!!

いやっ！あぁっ…
あがっ……！っっぁあ!!
しかし押し寄せる圧倒的な快楽の波は、そんな俺の忌避感など軽々と洗い流す。俺は口だけの、形だけの拒絶を並べるだけだった。
んっ❤そんな事言って…、あなたのここは止めて欲しくないみたいよ…？…んっ…❤
先走りが…んっ…、溢れてくる❤んちゅ❤
ぢゅるぅ❤
んくっ！凄いっ…舌が…！タマタマも…！んひぃ!!
ちゅちゅ❤
頭部を激しく上下させながら、左手で肉棹をシコシコと扱く母さん。いつの間にか陰嚢に添えられていた右手も、グニグニと揉みながら刺激を与えている。
……とても器用な母だった。

あ、熱いっ…！んくぅ！
アソコの付け根がっ…！！

そして急速に高まる射精感。
母の妙技に、俺は否応なく絶頂への
階段を昇らされていく。

き…気持イイよ母さん！
口の中…灼けるっ…！
あっ…あぁ……！
こんなのたまらないよ…!!

んっ…！今ピクピクって！
お汁も、トロトロっ…❤

ぢゅるるっ
ぢゅるるっ

つぐぅ!!
あ、亜耶さん…出るっ！
そんなにしたら…くあぁ!!

俺は尻と肩だけを壁に接したまま、
体を弓なりに引き攣らせた。
官能の波が駆け上がり、ザラついた
粘膜が喜悦の炎を焚きつける。

ぶびびび

んぢゅぶぅ！
いいのよ…❤
出したい時はそのまま！
んちゅ…❤んっ❤❤

あ！あぁっ!!出ちゃう！
イッちゃう!!

んちゅっ！来て！
…イッてっ❤❤
私の口の中にっ❤
ちゅ…ぢゅるうぅ！

あなたの子種汁…

全部私にっ…❤
私に呑ませて❤❤
んじゅるるる!!

お、おちんちんが…
吸われっ…！

くぁあっ！っあぁぁ!!

下品な台詞と共に、母の口が窄まる。
強烈なバキュームが、経験値ゼロの
俺にトドメを刺す。
もう耐えられない。そう思った、瞬間。

ぅあ!!
くあぁっ――!!
んっ!?
っ…♥
んっっ♥♥
どく
ぱぱぱ
ぶしゅ

んぷっ…ん❤
ぐっっ！くぁっ!!
っくぅっっっ!!!!
弾けるペニス。
母の口内に、熱いミルクをぶちまける。
んじゅぶっ❤っ…
精液…飛び出て❤❤
く…亜耶さん
くぁぁ!!…ぁぁ!!
んっ♡
んぷ♡
俺は膝をガクガクと震わせながら、
目の眩むような快感に身を委ねた。
後ろめたさも、わだかまりも…今は
思考の埒外だった。
んひぃ！んぎぃぃ！
俺、イってるっ…！
アソコからっ…！
熱いのが出てるぅっ!!

んぶっ❤なんて量❤
っ…じゅるるぅっ!!
くぁ!待ってっ……!
それやめっ…くぁ…!!
射精中も継続していた母のバキュームによって、半ば強制的に絞り出される精液。
俺の意思とは無関係に、陰茎は規則正しい拍子と共にドクドクとザーメンを送り出していく。
んじゅるぅ…!
その調子よっ…っ❤
ぢゅ♡
ぢゅるる♡
おちんぽミルク…
全部出しましょうね❤
んちゅ❤じゅっる❤
あく!は、離して
亜耶さんっ!
気持ち良すぎる!
おかしくなる…!!

手淫では決して得られないであろう強快美に、俺の脳髄はドロドロに溶けてしまう。

どくどくっ

あっ…くぁぁ…！

くぁ……っぁ…

んふっ…んん…❤

そして長い律動によって、枯れるほど精を吐き出したペニスも…、

っ…

ん…

ん……

…んぷ……❤

んぷ♡

っはぁ……はぁ…

……ぁぁ……

……やがては、終息。

んふぅ…んふぅ…❤
……っ…んっ…ちゅぷ…
射精が収まってから少し後、作業を終えた母さんが、肉棹から口を離す。ぷっくりと膨らんだ頬に溜まっているのは間違いなく俺の…息子の精液だ。
あっ…!えと…テ、ティッシュを!!
ちゅぷ…
ん…♡
……❤
無断で口内射精してしまった事に、今更ながら慌てる俺。俺はザーメン汁を吐き出す手立てを探そうと、ドアから身を滑らせる。しかしそんな俺の手首を、母さんの白い手が掴んでいた。

…え…？
あ、あの…？
俺を仰ぎ見る母さん。
小さく首を横に振り、にっこりと
微笑むと……
んくっ…んっ…
……く…❤
そのままゴクリと喉を鳴らした。
あっ……！
んく…
ごくっ…
んっ……んくっ…
……んく…❤❤
母さん……飲んでる…
……俺の……精液…
キスさえしたことがなかった俺
にとって、その行為は余りにも
倒錯的で…煽情的だった。

……

…ごちそうさま
とっても濃くて、元気な精子ね❤

俺は口を半開きにしたまま、おもむろに立ち上がる母さんを呆然と見つめた。
何食わぬ顔で口を拭う母の表情には、一欠片の嫌悪感も含まれていない。

そんな母にただただ圧倒され、無言で頷く俺だった…。

十年ぶりに再会した母さんは

熟達のソープ嬢になっていた…。

俺を実の息子とは気付かず

その熟れた裸体を惜しげもなく
差し出す母さん。

俺はそんな母に欲情し……、

人の道を…

大きく踏み外していく――――。

ヒロイン達が全カット日焼け肌の
日焼け版を同梱

ソープから始まる母子相姦純愛物語。

大ボリュームの434ページ！！

■収録内容■
サイズ:1600×1200
基本CG:19枚＋立ち絵3枚＋断面図等のカットイン多数
差分込み通常版:434枚
日焼け版:434枚
文字無し含む総合計:1600枚以上

体験版はここまでとなります
続きはぜひ製品版でお楽しみください❤